健康福祉常任委員会会議記録（概要）

令和４年４月１８日（月）

開　　会（午後１時３０分）

【議　　事】

〇特定事件「高齢者福祉について」

・認知症と共生する社会の実現に向けた取組の推進について

【概要説明】

前田福祉部長　高齢化社会、長寿社会となりまして、認知症の対策はとても大きな課題になっております。認知症というと、なりたくないもの、なったらどうしよう、なってしまうと本人も周りも困るものという印象が強くて、世の中にはどうしたら認知症にならないで済むかという情報が蔓延して、皆必死になっていることを日々感じております。確かに、できるだけ発症を遅らせるにこしたことはございません。また、そのための予防や早期発見といった取組はとても大切だと考えております。また、認知症が発症した場合に、相談できる場所や受けられる医療や支援、周りの理解といったものが整っていることが重要だと考えております。そして、認知症になっても大丈夫だと思えるように、御本人、そして御家族の安心と笑顔のために、周りは何ができるかということを考えて、行動できる人を増やしていく仕組みも続けているところでございます。

それでは、所沢市で行っている認知症施策等につきまして、担当者から

御説明をさせていただきます。

粕谷高齢者支援課長

認知症と共生する社会の実現に向けた取組の推進について説明させていただきます。

最初に、説明の流れをお話しさせていただきます。どうしたら所沢市の認知症施策を分かりやすく御理解いただけるのか、熟考した結果としまして、体系的に説明することが一番分かりやすいと考えました。まず初めに、国が令和元年６月１８日に制定した認知症施策推進大綱を基に、国の認知症施策の体系から、それをどう踏まえて市の認知症施策につながっているのかを説明いたします。その後に、令和４年度版高齢者福祉ガイドの認知症高齢者への支援のページを抜粋しまして、個別の施策について説明いたします。

それでは、令和元年６月１８日に制定された認知症施策推進大綱について説明いたします。まず説明の前に認知症施策ですが、資料を御覧になって分かるように、事業自体は点のように一つ一つになっていますが、その事業が線となり、そして面で認知症施策を実施しています。認知症施策は、この面の事業が一体となって実施しているイメージです。

認知症施策推進大綱の基本的な考え方としまして、認知症は誰もがなり得るものであり、家族や身近な人が認知症になることなどを含め、多くの人にとって身近なものとなっている現状があります。こうしたことから、「認知症の発症を遅らせ、認知症になっても希望を持って日常生活を過ご

せる社会を目指し、認知症の人や家族の視点を重視しながら、共生と予防を車の両輪として施策を推進していく」としています。このように、認知症施策は、共生と予防というように、広い体系の中で取り組んでいくことが示されています。

ここで予防という言葉の定義ですが、認知症予防とは認知症にならないという意味ではなく、認知症になるのを遅らせる、認知症になっても進行を緩やかにするという意味として使っています。

さらに説明しますと、この推進大綱では予防について、以下のように説明しています。

運動不足の改善、糖尿病や高血圧症等の生活習慣病の予防、社会参加による社会的孤立の解消や役割の保持等が、認知症の発症を遅らせることができる可能性が示唆されていることを踏まえ、予防に関するエビデンスの収集・普及とともに、通いの場における活動の推進など、正しい知識と理解に基づいた予防を含めた認知症への備えとしての取組に重点を置く。その結果として、７０歳代での発症を１０年間で１歳遅らせることを目指すとしています。

それでは話を戻しまして、認知症施策推進大綱は５本の柱からなっています。１本目の柱として、普及啓発・本人発信支援です。これは主に、認知症に関する理解促進、相談先の周知、認知症本人からの発信支援となっています。

２本目の柱としまして、予防です。これは主に、認知症予防に資する可

能性のある活動の推進、予防に関するエビデンスの収集の推進等となっています。

３本目の柱としまして、医療ケア・介護サービス・介護者への支援です。これは主に、早期発見・早期対応の体制の質の向上・連携強化、介護サービス基盤整備・介護人材確保、介護従事者の認知症対応力向上の促進、認知症の人の介護者の負担軽減の促進等となっています。

４本目の柱としまして、認知症バリアフリーの推進・若年性認知症の人への支援・社会参加支援です。これは主に、バリアフリーのまちづくり推進、地域支援体制の強化、成年後見制度の利用促進、消費者被害防止施策の推進、若年性認知症の人への支援等となっています。

最後に５本目の柱としまして研究開発・産業促進・国際展開となっております。

それでは、第８期所沢市高齢者福祉計画・介護保険事業計画の説明の前に、所沢市の高齢化率と要介護認定で把握している認知症高齢者数をお知らせします。所沢市の高齢化率は、令和４年３月末で２７．４％です。また、要介護認定で把握している認知症高齢者数、具体的には主治医意見書の認知症高齢者の日常生活自立度判定基準でⅡa 以上の方は、令和２年度が９，７０９人、令和３年度が９，９２４人でした。現在、こうした状況となっています。

本題に戻りまして、第８期計画では、認知症施策推進大綱を踏まえてどのような具体的な事業を実施しているか、現状の取組について説明いたし

ます。

最初に、１本目の柱の普及啓発・本人発信支援ですが、市では認知症サポーター養成講座を開催しています。後ほど、高齢者福祉ガイドの抜粋を基に説明いたします。

続きまして、認知症地域支援推進員の活動として、ところざわオレンジウィークを令和２年度、令和３年度と開催しました。認知症地域支援推進員は認知症の方やその家族の支援ネットワークの構築を行ったり、認知症の診断を行う医療機関や介護サービス事業所とのネットワークの構築・連携支援を行ったりしています。現在、高齢者支援課の保健師３人と、各地域包括支援センターに配置されており、合計１７人で活動しています。

ところざわオレンジウィークを、月曜日から金曜日までの５日間、市役所１階の市民ホールで開催していまして、令和３年度のところざわオレンジウィークでは、市内のグループホームや２５の介護事業所に協力していただき、施設の日常が分かる写真や認知症の方が制作した絵画や作品を展示したり、公益社団法人認知症の人と家族の会埼玉県支部の協力で、認知症当事者の写真展として展示したり、認知症本人からの情報発信として、施設の方に協力していただき、本人と家族の声をメッセージとして展示したりしました。頂いた本人・家族からのメッセージを一部紹介しますと、「何もできなくなったと思わないでください。まだ自分にできることを取り上げないでください。役割が欲しいのです。」、「私のことが、もう分からなくなった母ですが、施設の方々のお陰で母の笑顔を日々、たくさん

見ることができています。ありがとうございます。」、「認知症の本を読んで勉強したけど、本のとおりにいかない。戸惑うことが多い。」等のメッセージを頂きました。

　また来場者の方からも自由にメッセージを書いていただき、展示させていただきました。その中のメッセージで、「誰でもなり得る病気と認識して、認めあうことが大切だと日々実感しています。」等のメッセージを頂きました。

　オレンジウィークでは、併せて、認知症に関する理解促進として、高齢者支援課で作成している認知症あんしんガイド等のパンフレットの配布や、認知症の相談窓口である、もの忘れ相談医の周知も行いました。

　続きまして、現状の取組として、広報ところざわでの周知啓発を行っています。昨年の広報ところざわ９月号の特集号では、世界アルツハイマー月間である９月に合わせて、「自分らしく笑顔の花咲くまちに」というテーマで、認知症への理解と相談窓口等を掲載しました。また、今年度は広報ところざわで、認知症への対応について連載記事を掲載する予定です。

　２本目の柱の予防ですが、市では、お達者倶楽部、トコろん元気百歳体操等、自主的な通いの場の活動を支援し推進しています。現在、新型コロナウイルスの感染が収束していない状況で、自主的に活動を中止している団体もありますが、新しい生活様式の中で活動していただくことで、介護予防・認知症予防に資すると考えておりますので、今年度も通いの場を支援・推進していきます。

次の介護予防教室の開催ですが、筋力アップのための体操や介護予防・認知症予防の講話、教室終了後の仲間づくりなどを目的として、いきいき健康体操教室を市内３つのスポーツクラブに委託しまして開催しております。

また地域包括支援センターでは、各圏域の高齢者人口により開催する回数が異なりますが、令和４年２月末現在では市内全体で７４回の介護予防教室を開催しています。

３本目の柱の医療ケア・介護サービス・介護者への支援ですが、もの忘れ相談医の案内につきましては、所沢市医師会がもの忘れ相談医の登録制度を行っておりまして、現在市内３７の医療機関に４３人が登録されています。もの忘れ相談医が認知症の診断を行いまして、さらに認知症の専門医療機関であるロイヤルこころの里病院、東所沢病院につなげることで、認知症の早期発見・早期治療を進めています。こちらの周知等、医師会と連携して行っています。

次の健幸のための「元気アップ大調査」ですが、これは令和２年度まで健やか生活アンケートという名称で実施していたものを、令和３年度からより親しみが持てる名称に変更して実施しています。７０歳以上の偶数年齢の方に調査票や介護予防事業や認知症の取組などの案内を送っていまして、運動・口腔・社会参加・生活状況・ボランティアについての２１項目の調査の他に、１０項目の自分でできる認知症の気づきチェックリストによる、自己チェックによる調査を行っています。なお、このチェックリ

ストは東京都健康長寿医療センター研究所が監修していまして、著作権のある東京都の許可を得て使っています。また、所沢市医師会にもこのチェックリストを使うことをお伝えし、承諾していただいているところです。

この自分でできる認知症の気づきチェックリストですが、４０点満点で２０点以上が、認知機能や社会生活に支障が出ている可能性があるとしていますが、あくまでおおよその目安で医学的診断に代わるものではなく、実際には認知症の診断には医療機関の受診が必要です。ただし、こうした方につきましては、他の調査項目と併せて気になる方として、地域包括支援センターの職員が直接訪問しております。ちなみに、認知機能や社会生活に支障が出ている可能性がある２０点以上の方は４９３人いました。

次の認知症地域支援推進員の配置ですが、先ほどオレンジウィークの説明で推進員の説明をさせていただきましたので、説明は割愛いたします。

次に、認知症初期集中支援チームですが、後ほど高齢者福祉ガイドの抜粋を基に説明いたします。

続きまして、認知症ケアパスの作成・普及（所沢市認知症あんしんガイド）ですが、認知症ケアパスとは認知症の段階に応じたケアや支援、利用できるサービスの流れを示したものです。所沢市認知症あんしんガイドを、先ほどのオレンジウィークで来場者に配ったり、高齢者支援課や地域包括支援センターでの認知症の相談時に使用したりしています。

次に、認知症カフェの取組ですが、後ほど高齢者福祉ガイドの抜粋を基に説明いたします。

続きまして、ＧＰＳ機器の貸出しですが、同じく、後ほど高齢者福祉ガイドの抜粋を基に説明いたします。

次に、家族介護者支援事業ですが、各地域包括支援センターが年４回、介護者の身体的・精神的な負担軽減につながるようなテーマで開催しています。事業内容ですが、介護者の交流会だけでなく、例えば吾妻地域包括支援センターでは、介護者の介護離職を防ぐために、社会保険労務士を講師にした勤務先で利用できる介護休業制度などの支援制度の講座や、小手指第１地域包括支援センターでは、福祉住環境コーディネーターを講師にした福祉用具の使い方などの内容で講座を開催しました。

次に、４本目の柱の認知症バリアフリーの推進・若年性認知症の人への支援・社会参加支援ですが、地域でみまもり支え合い事業「トコろんおかえりＱＲ」について、後ほど高齢者福祉ガイドの抜粋を基に説明いたします。

認知症施策の全体像の説明は、以上となります。

資料が変わりまして、高齢者福祉ガイドを抜粋しました、認知症高齢者への支援の認知症サポーター養成講座を御覧ください。認知症サポーター養成講座は、認知症の方やその家族が安心して暮らし続けることのできる地域づくりを推進するために開催しています。認知症サポーターは、何か特別なことをする人ではなく、講座を通じて認知症についての正しい知識を習得していただき、自分のできる範囲で認知症の人や家族を応援するのが認知症サポーターになります。申込みがあれば、１０名程度の団体でも

開催しています。

なお、ここには記載していませんが、昨年度、認知症サポーター養成講座受講後の方を対象に、１コース３回の認知症サポーターステップアップ講座を２回開催しました。講座の内容としましては、認知症に関する動向や基礎知識、認知症当事者や軽度の認知症が疑われる高齢者との接し方について、講義やグループワーク、ロールプレイング等を行いまして、さらなるステップアップを図っています。また、今後ボランティア活動ができる方には、ボランティア名簿に登録させていただきました。現在、認知症カフェでのボランティアはありますが、認知症カフェがほとんど休止となっております。トコろんおかえりＱＲが始まりましたので、こうした周知活動など、今後の展開を現在検討しているところです。

続きまして、認知症初期集中支援チームですが、この事業は、医師会から認知症専門医である認知症サポート医がいる平沢記念病院、現在のロイヤルこころの里病院を推薦していただきまして、平成２９年７月から実施している事業です。内容としましては、認知症またはその疑いのある方やその家族の自宅をチーム員が訪問しまして、認知症サポート医や地域包括支援センターと協力しながら相談に応じています。現在、チーム員は１１名おりまして、認知症サポート医が２名、看護師２名、精神保健福祉士が４名、作業療法士が１名、介護福祉士が１名、公認心理士が１名の１１名体制で、必要に応じてチーム員会議等に出席しています。

対象となる方につきましては、若年性認知症の方も対象となり、自宅で

生活している４０歳以上の認知症状などでお困りの方で、認知症の診断を受けていない方、認知症の診断を受けたが治療を中断している方、介護保険サービスを利用していない方、または利用を中断している方、何らかのサービスは利用しているが認知症の症状が強く対応に困っている方となります。

なお、令和３年度の認知症初期集中支援チームで支援した件数は、６５件です。内訳は、訪問につながったケースが５７件、相談のみが８件となっています。この件数は、近隣の入間市が１件、狭山市５件、川越市２件と比較しまして、大変多い件数となっています。対応件数が多い理由としては２つあります。１つは、ロイヤルこころの里病院の初期集中支援チームには、専任の看護師と相談員が配置されていること。２つ目は、毎年、地域包括支援センター向けの報告会を行っており、既に顔の見える関係となっていることで早期からの相談対応ができ、対応件数が多くなっていると考えています。

続きまして、みんなのカフェ（認知症カフェ）ですが、みんなのカフェとは、認知症の方やその家族、医療や介護の専門職、地域の方など、誰もが気軽に参加できる集いの場のことです。開催場所は、主にグループホーム、有料老人ホーム、特別養護老人ホームなどの高齢者施設を会場としていまして、昨年度、市内１４か所で開催することとなっていましたが、主に高齢者施設を会場としているため、外部からの来訪者に慎重なこともあり、３か所のみの開催となりました。今年度は、１３の法人と契約しまし

て、年間計画を立てていただいています。しかしながら、コロナの感染状況により、開催の判断は法人に任せているところです。

なお、所沢市の認知症カフェの特色として、専門職による個別相談に対応できるよう、専門職である社会福祉士、精神保健福祉士、保健師、看護師、理学療法士、作業療法士、介護福祉士のいずれか１名の人員配置をお願いしています。

続きまして、ＧＰＳ機器の貸出しですが、徘徊で行方不明となった高齢者をＧＰＳで探索し、早期に居場所を把握することで、介護する家族の負担軽減と、本人と家族が安心して生活できる環境がつくられるよう実施しているものです。サービス内容としましては、家族がＧＰＳ探索で徘徊した本人の現在の位置をパソコンやスマホ等から確認できます。また、有料ではありますが、家族が現地に保護された本人を迎えに行けない場合には、委託業者のセコム株式会社が駆けつけるサービスもあります。

次に、地域でみまもり支え合い事業「トコろんおかえりＱＲ」ですが、所沢市とトコろんおかえりＱＲを製作する株式会社マップル、及び市内の４０店舗でのトコろんおかえりＱＲの販売やトコロみまもりネット協力事業者として見守り活動に協力する株式会社セブン‐イレブン・ジャパンの３者で、「地域でみまもり支え合い事業（トコろんおかえりＱＲ）に関する連携協定書」を締結しまして、令和４年１月２１日にスタートした事業です。

このトコろんおかえりＱＲには４つの機能がありまして、家族に現在の

位置情報を知らせる機能、コメント機能、写真送付機能のほか、家族が電話番号を登録していれば、発見者が直接家族に電話連絡することができる機能があります。

現在、一般販売として、市内４０店舗のセブン‐イレブンでの販売とオンラインショップでの販売のほか、認知症で徘徊されるおそれのある対象者には、今年２月に７００枚ほど郵送しています。また、各地域包括支援センターでも、必要な方に在庫限りとなりますが無償配布しています。なお、４月１３日時点で、一般販売数は７１枚となっております。

この取組を通じて、認知症高齢者やその家族を地域で見守り支え合い、誰もが安心して暮らしていける体制づくりを進めていきます。

以上で、説明は終了いたします。

末吉委員長　説明は終わりました。ここで、暫時休憩します。

休　　憩　（午後１時５４分）

再　　開　（午後２時２分）

【質　疑】

村上委員　令和２年度と令和３年度の要介護認定の数字を聞いて、約２２０人増えているということだが、この増え方はコロナの前の時点との変化はあるか。

粕谷高齢者支援課長	これは要介護認定の主治医意見書に基づいた数字で、令和２年度と令和３年度は、要介護認定の方も、コロナの関係で主治医意見書をそのまま使っていいということになっています。そういう状況もあり、分析しづらいところではあります。ただ、高齢者人口は増えているので、間違いなく認知症の方は増えているという認識でございます。
城下委員	今の関連で、コロナ禍で認知症が進行しているという話も地域に入るとよく聞く。令和３年度と令和２年度の数字についてだが、認知症施策推進大綱の中の具体的な施策の４番目、若年性認知症の人への支援等とある。今示された数字の中に若年性の認知症は何人くらいいるのか把握しているか。
粕谷高齢者支援課長	高齢者支援課で具体的には把握はしていませんが、埼玉県の資料では、人口１０万人当たりの若年性認知症の方が５０．９人という推計値があります。このため、令和３年１２月末現在の所沢市の人口から推計すると、約１０２人という数字が出ております。ただ、地域包括支援センターの職員から聞くところによると、６５歳以上を地域包括支援センターの対象としている中で、若年性認知症の把握は聞いていないとのことです。おそらくは、若い方は、自分でインターネットやスマートフォンで相談先などを調べられるため、地域包括支援センターにはつながっていないのかと推測

	しております。
城下委員	具体的な施策①普及啓発・本人発信支援について、御家族がいる方はともかく、単身でお住いの高齢者は増えている。私も地域のそういった方の相談を受けるが、比較的身近な人、例えば地域の方や友達は、本人に認知症かもしれないとか、認知症外来に行ったらどうかとか、なかなか言えないという話を聞いている。当然民生委員などにつなげてはいくが、治療や進行を遅らせるための医療機関につなげていく仕組みがうまくかみ合っていないという印象を持っている。その辺はどのように民生委員や地域包括支援センターと連携しているのか。
粕谷高齢者支援課長	健幸のための「元気アップ大調査」を７０歳以上の偶数年齢の方に毎年行っており、このアンケートは要支援・要介護認定を受けていない方を対象にお送りしています。先ほど御説明したように、自分でできる認知症の気づきチェックリストがありますので、そこで自己チェックができます。その後に、高齢者支援課から結果を送らせていただいているため、こうした中でセルフチェックできるのが一つです。また、４０点満点中２０点以上の方には、地域包括支援センターが気になる方として訪問しておりますので、そういったところで認知症の相談につなげていく取組を行っております。

城下委員	自己チェックできる方はまだいいが、自覚がない方はやはりできない。そういう方たちへの手だてということで地域もすごく悩んでいると思う。そういうケースはどのような形でつなげていく仕組みがあるのか。
粕谷高齢者支援課長	現状では、地域包括支援センターが民生委員や地域の方、ケアマネージャーといったいろいろなところに情報を張り巡らせています。そういうところから、例えば独居で認知症の症状が疑われる方などを直接訪問してつなげていく流れをつくっております。
石原委員	トコろんおかえりＱＲは２月から始めて、セブン‐イレブンや通販も含めて４月現在だと７１枚の販売があったということで、自分で一般販売で購入された方は登録の意志が固く、使いたいから買ったということで、イコール登録数になっているのかなと思う。無料配布された方がどれくらい登録したかという集計は現在捉えているのか。あるいはどの段階までいけば数字として捉えられるのか。
粕谷高齢者支援課長	現状では無料配布した方がどれくらい登録されたのかはまだ把握していませんが、これから把握したいと考えております。
石原委員	トコろんおかえりＱＲの動画があるが、すごく分かりやすかったし、見終わった後に自分もできることがあればやりたいなという気持ちになる

	ので、サポーター講座とかを受けていない方に見ていただいても啓発につながるのだろうなと思った。今、ユーチューブで１３７回くらいの再生数だが、これはどんなところで動画を拡散して、行事やイベントで皆さんの目に触れていただくような機会を考えているのか。
粕谷高齢者支援課長	高齢者支援課でいろいろな事業を行っておりまして、例えば認知症サポーター養成講座などがあります。また、市役所に映像を流せるところがありますので、そういったいろいろなところで周知していきたいと考えております。
城下委員	第８期所沢市高齢者福祉計画・介護保険事業計画で、認知症サポーター養成講座の受講者数の目標が年間２，５００人と位置づけられているが、現在は何人か。
粕谷高齢者支援課長	令和３年度は１，２５７人、令和２年度は１，０９９人の受講者がありました。今回はコロナ禍でしたが、オンラインでの開催を模索する中で、三ケ島中学校でオンラインシステムを活用して開催いたしました。実際に難しさはあったということですが、ほかの学校でも実施につながるものと考えております。
城下委員	トータルではどれくらいの方がこの間受講したのか。受講者数の累計

	は。
粕谷高齢者支援課長	令和３年度末の累計は、２４，８７５人です。
城下委員	何年間になるのか。
粕谷高齢者支援課長	平成２０年度頃から行っております。
城下委員	③医療ケア・介護サービス・介護者への支援で、所沢市医師会と連携しており、これについてはロイヤルこころの里病院と東所沢病院、３７医療機関ということだが、医師会はいろいろな分野があるが、例えば聞こえといった部分での先生方との連携は入っているのか。どういった分野の先生方との連携なのか。
粕谷高齢者支援課長	もの忘れ相談医は基本的には専門外の医師ですが、認知症について家族からの相談受付や本人の診療をしていただいて、早期に専門の医療機関につなげることを役割としています。現状では、地域の医療機関が全体で協力して、認知症を疑われる方を、ロイヤルこころの里病院や東所沢病院といった専門医療機関につなげる体制を敷いております。

谷口委員　　認知症の施策はいろいろなことをしなければならないので大変だが、その中で認知症予防をどうやって効率的にこれからやっていくかは一つの大きな肝だと思う。狭い経験から言うと、人と話さなくなることで非常に認知機能は衰えるし、やはり会話を誰かとやっていくと。そういった中で、本来は人と人とで直接というのが本筋だと思うが、今はいろいろな介護予防ロボットのようなツールが出てきているので、そういったところをうまく活用して、いかにして会話をするような環境に持っていきながら、それを続けていけるかが非常に重要なことと思っている。その辺りの今後の取組というか、新しい機器についての研究含めてどういった考えなのか。

前田福祉部長　　いろいろなやり方があって、コロナが収まったらいち早く集いの場が活性化できるといいというのが一つです。また、かなりの高齢者がスマホを持っているということで、地域包括支援センターやまちづくりセンター主催のスマホ教室をやって、スマホでの動画で対話をするとか、そのようなことも含めて、いろいろな形で取り組み始めているところです。

村上委員　　普及啓発・本人発信支援とあるが、私の周りにも認知症の課題があり、基本的には、明らかに認知症にならないと周りも分からないし、本人は気がつかない。周りはいよいよ認知症になってきてるなと分かると思うが。結局入り口の部分が一番難しいのではないかという気がする。認知症にな

った後の対策はいろいろそろっているのでいいと思うが、具体的な啓発普及、本人発信の支援についての取っかかりは体系的にはあるが、実感としてどうなのか。具体的にこのことがあるがゆえに把握ができているとか増えているとかいうものがあるのか。非常にここのところが難しいという印象を持つが、実感としてどうなのか、実際の場で。スクリーニングがなかなかできないから困っているのだが。やはり、こういう体系的な形で取り組んでいくことで少しでも拾い上げていこうということなのか。決定打的に、もっといろいろなことを検討していく必要があるのかという課題を持っているのか。最後はそこになるのだが。もっといろいろなことでスクリーニングしていくための課題がまだまだされていかなければいけない状態なのか。印象的なものでもいいのだが、どうなのか。体系的に掲げてはいるが、実際はどうなのかという、ものすごい難しさがあるのではという印象を持っているという意味で、感想や意見は。

粕谷高齢者支援課長	普及啓発につきましては、認知症サポーター養成講座の実施などといったところで、地域が認知症への理解を深めていただいているところです。 ストレートな回答にはならないかもしれませんが、トコろんおかえりＱＲ事業には、大きな点が２つあります。１つが普及啓発です。トコろんおかえりＱＲ事業を地域に周知することで、認知症への理解につながるきっかけとなると思っております。もう１つが、認知症になりますと、本人が迷ってしまうかもしれないということで外出を諦めてしまいますが、認知

症への理解が深まって、発見した方が家族に通知するという事業ですので、周囲の方の協力を得られることで、認知症の方の社会参加支援につながる事業と思っております。この一つのツールで全て解決するわけではありませんが、この事業をうまく使って、住民の方を巻き込んだ事業にしていきたいと考えております。

前田福祉部長　数の把握はとても難しいことです。近所の方と話していても、この前言っていたことを覚えていないなとか、何回も同じ話をしているなということはありますが、それをもって認知症と決めつけるのは難しいですし、また、認知症になるとどうなるのか想像がつかない方々も大勢いらっしゃるということで、トコろんおかえりＱＲは取っかかりとしては、認知症とはどういうものなのかを多くの市民の方が知るきっかけになると思っていいます。東京都豊島区や東京都東村山市から来て、名前も分からないし、何も思い出せないという方もぽつぽついます。そうすると、その自治体に、「これを絶対やってください。来る実績があるから。」と声をかけています。多くの方がこういった取組を知ることで、自分の家族にも近所にも認知症の方がいなくても、こういうものがあるから自分もこういう関わりをしていけたらいいんだなと行動する人が増えていくということ、そこまで至らなくてもサポートをした人が、自分がサポートされる側になる日も来るかもしれないなということで、その時にどのような心づもりでいたらいいのだろうということも含めて、多くの人が認知症に関心を持っていただ

くのが大切です。あくまでもこの事業は取っかかりとして、皆に知ってもらおうということで進めているところでございます。

村上委員　　この問題を解決するのは地域力しかないと思っていて、その意味で言うと、この事業はすごくよいと思っている。どこかのテレビ番組で取り上げてくれていたか。

前田福祉部長　　ネットニュースでは取り上げていただいています。

村上委員　　これは先進的な取組になると思うので、いろいろな形で他の自治体にも伝えて広げていくことにはもっと力を入れてもいいという印象がある。

私の母の話だが、買い物に行って２時間帰ってこないことがある。ある時、家族が全然違う地域を車で通ったら、「うちのおばあちゃんに似た人だね」と言っていたら母だったということがある。本人は自分が認知症という感覚はなくて、逆に認知症と言うと馬鹿にするなと言う。そういうことを発見して、地域が見守っていくということが普及していくことは非常に大事だと思う。母は自分が認知症だと思ってなくて、我々も認知症と思っていないが、２時間道に迷って帰って来られなくなるという事実がある。この意識啓発という部分で言えば、所沢市としては大変フィットしたツールをつくっていただけたと思うので、これはもっとＰＲをしてほしい。どこにＰＲするのかという選択は考えていく必要があると思うが。現

	時点ではこれをどういうツールや相手に活用して使っているのか。
柏谷高齢者支援課長	５月２８日に富岡地区で、地域でみまもり支えあい体験会を催す予定です。こちらでは、トコろんおかえりＱＲを使いまして、地域で見守ることについて、一緒に体験して考えるという事業です。
城下委員	一般販売が７１枚ということで、実施して間もないと思うが、実際に困っている認知症の方をつなげた事例はあるのか。
柏谷高齢者支援課長	今のところそういった声は聞いていません。これからですが、メールアドレスの登録を３つできるので、そちらのアドレス宛てに、このツールで助かった方の声や、認知症の情報などを情報発信して、双方向で行う事業として進めていきたいと思っており、そういう声も拾っていきたいと思っています。
城下委員	いずれにしても実績はこれからということと、先ほどの石原委員の質疑で、無料配布の登録数は未把握ということだったが、把握はできるのか。
柏谷高齢者支援課長	把握しようと思えば送った方は分かります。四半期ごとにマップルとセブン‐イレブンと意見交換会があり、今月末にありますので、そういったタイミングで把握していきたいと考えております。

前田福祉部長	来月地域包括支援センターとまちづくり協議会で体験会があります。三ケ島では、以前認知症役の人がいるような体験会もありました。これはテクニックが必要で、シールを貼っている人がいて、「大丈夫ですか」という声のかけ方でしたり、こういうふうにやるのだということを実際に体験してもらって、いざという時に対応できる人を増やしていくというものです。それこそ中学生や高校生など、大人だけではなくいろいろな形でやっていけるのではと考えていきたいと思います。また、まちづくり協議会があるところは地域包括支援センターと連携しながら、できる地域はどんどんやっていただいて、こういうことをやりましたという周知も併せてお願いしていきたいと思います。
長岡委員	トコろんおかえりＱＲは無料配布したものとセブン‐イレブンやＡｍａｚｏｎで買ったものがあるということだが、それでつなげて帰ってこられた実績は、まとめて市で把握できるものなのか。
粕谷高齢者支援課長	協定書の中で、販売数や登録数、位置情報を検索した件数を教えてもらうことになっています。ただ、実際にトコろんおかえりＱＲで助けられたかというところは、このツールでは分かりませんので、そういった声を拾っていきたいと考えています。

長岡委員	実績が積まれるのであれば把握はできた方がいいと思う。 認知症サポーター養成講座は、コロナ禍でオンラインでも受講できたということだが、受講者は増えているのか。コロナ禍ではどれくらいいるのか。目標は２，５００人とあるが、これはコロナ前の目標なのか。コロナ禍ではどれくらいなのか。
粕谷高齢者支援課長	目標は２，５００人ですが、令和３年度は約半分の１，２５７人、令和２年度は１，０９９人です。
長岡委員	オンラインなら現地に行かなくても対応の方法が分かると思うが、これの周知啓発は力を入れているのか。
粕谷高齢者支援課長	今回、三ケ島中学校でオンラインシステムを活用してできましたので、こうした取組ができることを他の学校にも伝えていきたいと思っています。
長岡委員	学生だけでなく、一般の方向けは考えているのか。
粕谷高齢者支援課長	学校は、通信システムが整ったことがあってできました。一般の企業等では、設備が整っていればできると思いますが、そうでない集まりですと難しいと考えています。

長岡委員	地元の企業は難しいのか。
粕谷高齢者支援課長	金融機関等からの依頼はありますが、昨年度はオンライン開催については聞いていないです。できるのであればこういう仕組みがあることを伝えていきたいと思います。
長岡委員	せっかくオンラインで開催されているのであれば、２，５００人を割らないのがいいのではないかと思う。 また、予防について、お達者倶楽部や健康体操のような団体の方は、コロナ禍でやっていないところも増えており、そのまま辞めてしまったグループもあると聞いたが、そろそろ再開して元に戻ってくるというところなのか。
粕谷高齢者支援課長	確かに休止しているところもありますが、各団体に向けて、厚生労働省が出した通いの場再開に向けたチェックシートがあります。また、市の方で感染予防のポイントをまとめたものを各団体の代表者に送っております。お達者倶楽部は活動しているところもありますので、その情報交換を目的に、団体交流会を３月に行いました。そういったところで、活動再開に向けて支援しております。

長岡委員	予防について、健康体操とか、しゃべることが大事ということだが、そのほかに力を入れていることはあるのか。予防に対して重要だと気づいたことは何か。
粕谷高齢者支援課長	認知症施策推進大綱にもあるように、国からのエビデンスを基に市も計画の位置づけをしていますので、現状では、介護予防にこれがいいからということではなく、今実施している予防事業を今後も推進していきたいと思っております。
長岡委員	しゃべることと運動すること以外に、こういうことが大事というものは見つかっていないのか。
粕谷高齢者支援課長	予防には２本ありまして、長岡委員のおっしゃった社会参加のほかに、生活習慣病予防があります。生活習慣病の予防につきましては、保健センターで栄養教室や口腔の教室もやっております。そういったところで予防につながる事業を行っております。
長岡委員	食べた方がいいものはあるのか。
粕谷高齢者支援課長	保健センターでやっております。

長岡委員	定期的におすすめして、ちゃんとやっていますかというようなこともやっているのか。
前田福祉部長	すこやか栄養教室というような形でもやっていますので、福祉部だけでなく健康推進部も一体となっております。また、広報ところざわにいろいろな健康レシピが掲載されることもあります。あとは、一般的にまちづくりセンターの部屋を使って何か事業をやっているところでも、福祉の観点からではなくても、文化活動をしているところにもそういったノウハウが広がっていくと、あまり関心がない人もそういうことを取り入れていけるということで、連携してやっていきたいと思っています。
長岡委員	結構縦割りと伺うがいかがか。
前田福祉部長	そういうことがないように連携に努めてまいりたいと思います。
谷口委員	トコろんおかえりＱＲの動画は、親しみやすくて面白いなというインパクトがある。村上委員が言ったように、トコろんおかえりＱＲをどうやって広げていくかということで、この動画は著作権の縛りはあるのか。
粕谷高齢者支	全て職員の手作りです。

援課長

谷口委員　例えば、市が主催する会合とかでパワーポイントを使うが、待ち時間や手持ち無沙汰のタイミングでこの動画を使ってくださいという形で、政策会議で各部長に下ろしていろいろ使えるとか。あるいは、市民団体で、介護関係だけでなく、ここにアクセスすればこの動画をダウンロードできて、会合の待ち時間や始まる時間に流せるし。あるいはプログラムの中で、５分程度の動画なので、こういう情報提供というのは一つのコンテンツとしてどうでしょうかと。そういう形で拡散する方法はあると思うが、今後どういうふうに考えているのか。

前田福祉部長　アイデアを頂きましたので、早速採用させていただきたいと思います。

越阪部委員　認知症は、誰でもこれからなる可能性があるので大変なことだと思う。身内の中でも、私の母や議員の仲間も認知症になった。随分前の話を思い出したが、その時は中間施設のような言い方があったが、退院してすぐの人が、手間暇かかるので、それをどこかで預かっていただくとか、認知症の人でも広い地域で、中間施設と名乗るところで預かってくれるというのが静岡かどこかであった気がする。中間施設のようなことができる施策は考えているのか。前に、中間施設をつくろうとして保健センターになってしまったといういきさつがある。居場所ができるというか、大変なのだろ

うが、例えば、基地の跡地をそうするとか、カルチャーパークがそういうふうになるとか。そういう場所が実際になるようなことができるといいと思っているのだが、夢の話かもしれないが、そういうことを考えているところもあったようなので、今後そういうことは考えられないか。今のことで手いっぱいかもしれないが。

前田福祉部長　ショートステイなどで様子を見ながら、御自宅に戻ってサービスを使いながら様子を見ていく形が現状なのかと思っております。個別の状況があり、どんなことに困っていてどういうふうにつなげていったらいいのかは悩ましいところです。個々で皆違う状況もありますので、一つそういう施設があって誰でもどうぞとなるといいのかどうかというところです。

越阪部委員　本当は地域の中でそうなっているのが一番いいが、なかなかそこまでいかないというか、全員がそこでオーケーだというわけにはいかないと思う。生活できるというか、家族や家庭が本当に困ってしまう。実際どういうふうにしているかというと、やはり見守らないといけない。鍵をかけるようになってしまうまでは時間がかかる。初期の段階から分からなくなってしまうというか。その時の生活ができるような、コミュニケーションができるような場を、ちょっと広い場所で設けられるというか、そういう居場所があれば本当にすばらしい。

前田福祉部長　　それほど重くなる前から、普段からデイサービスに行って、施設に慣れていく、症状が重くなって家族も大変になってきたら、例えば月１回のショートステイを利用しながら、家族も少しレスパイトしながら、長く家で過ごせるようにしていくといった形のものは既にできていると思います。ですが、この先どうなっていくか分からない人に、そういう仕組みがあるから大丈夫だということを、知っていただくことも大事だと思います。そういうことも折に触れてやっていけたらいいと思います。

村上委員　　入り口の部分は難しい課題だと思う。委員からいろいろな話があったが。結局私が考えるのは、認知症になるのが遅くなったという結果があればいい。今、健幸長寿ところざわで歩いたりとかやっているが、ああいったことでも皆がこうやっていると、そういった関わりの中で、結果的に認知症が遅くなっている。先ほど縦割りという話があったが、いろいろなところで、例えばコミュニティだったらコミュニティをどんどん充実していきましょうねと、活性化していくことが結果的に認知症を遅らせることになるのだと思う。話は違うが、所沢市は耐震化を進めていくという部分で、市が関われる部分は全体の５％しかない。あとは民間の活力で自然に住宅が建て替わっていく中で、耐震化が結果的に進むのと同じ概念だと思う。やはりある程度の啓発・広報活動は非常に大事だと思うが、所沢市は認知症週間というものは設けているのか。

前田福祉部長	世界アルツハイマー月間に合わせて、９月にところざわオレンジウィークで展示や周知をしています。
村上委員	オレンジウィークなどあるが、こういう時の広報活動を少し工夫していくというか、先ほど言ったが、認知症になった人やなりそうな人だけではなく、結果的に認知症になる年齢をいろいろな形で自然と遅らせていくまちづくりを、漠然としているが、やるのがいい。坂が多いところは足腰強い健康な人が多いのと同じように、そういう類は、分かってしまったら認知症対策になる。その前の段階は、議会もそうかもしれないが、そういう入り口の難しいものというのは、全体的な、もう少し大きな啓発活動、週間についてももっと大きなうねりが出るような工夫をするのがいいのではと考えるがどうか。
前田福祉部長	今後、検討していきたいと考えています。
城下委員	大変な取組ということを改めて受け止めた。発症を遅らせるに当たり、コミュニケーションの活性化は大事で、いろいろな施策をやっている。聞こえの問題は大きいと思う。地域に入って、結局聞こえないから行かない。人としゃべらない、家族ともしゃべらないというのがだんだんと増えてきている。医師会とも連携しているので、今聞いたら専門外の医師がまずは相談を受けて専門の医師につなげるという話もあったが、聴覚、いわゆる

	聞こえの部分についても位置づけていかないと、なかなか早期発見、発症を遅らせるというところでは、せっかくいい取組をしているので、そこは合わせてやっていく必要があると思うがどうか。医師会のとの連携も含めて。国も今やり始めているようで、フレイル対策の一環にもなるので、それについての考え方は。
粕谷高齢者支援課長	厚生労働省が、難聴と認知機能の低下との関係についてエビデンスを集めており、今後実態把握の結果が発表されるとのことですので、それをもって研究していきたいと思います。
長岡委員	注文をまちがえる料理店について、所沢市内では今後そういった取組はあるか。各自治体から問い合わせがあるようだが。
粕谷高齢者支援課長	それはおそらく障害者の就労継続支援Ａ型・Ｂ型のことかと思われます。
長岡委員	そういうものも、認知症の方の居場所づくりの一環になるのではないか。温かい目で、カフェで、注文を間違えるけれども、というようなやり方で、居場所づくりになるのではと思うがいかがか。
粕谷高齢者支	今はコロナ禍で、３月時点では認知症カフェも３か所しか開催しており

援課長	ませんが、認知症カフェの方につきましては、認知症の方がいらっしゃったら、必ず役割を持たせてくださいと話をしています。そういうところで、認知症の方が役割を持って自分の存在を意識していただいて、活動できる場を提供しております。
長岡委員	そういうことがもっと増えていったらいいと思う。地域の人の温かい目で見守っていただくことが必要かと思う。
	【質疑終結】
末吉委員長	以上で、説明に対する質疑を終結いたします。ここで協議のため休憩します。 休　　憩（午後２時５８分） （休憩中に協議会を開催） 再　　開（午後３時７分）
末吉委員長	本日の審査を終了いたします。
	散　会（午後３時７分）